



童貞を拗らせた神様に執着溺愛

されています

地味な公務員の私が異世界召喚

地味な公務員の私が、童貞を拗らせた神様に異世界召喚され、執着溺愛されています

第一章..神社のキジ猫

第二章..異世界へ召喚されました

第三章..湯殿で知らされた結婚

第四章..生き神様からの告白

第五章..初めてを教えて

第六章..朝まで離してもらえない初夜

最終章..奇跡を起こした終わり

第一章：神社のキジ猫

「どうか、私にも素敵な男性が現れますように。贅沢は言いません。あ、でも私だけを大切に愛してくれて、浮気はしない誠実な人がいいです」

休みのたび通っている近所の小さな神社。

私はお賽銭を入れ、いつもと同じ願い事をする。

それと同時に、チリンと微かな音がして、首に小さな鈴をつけたキジ猫がひよこりと現れた。毎回、お参りが終わるのを見越したようにやつてくる、キジ猫のプリン。他に参拝する人なんて滅多にいないのに、気づくとプリンが現れる。

今日もいつものように足元に寄ってきて、すりすり私の脚に顔を擦りつける。

「プリン、また来たよ。ちゅーるも持ってきてる」

「へー、そう」とでも言うように私を見て、あくびをしながら後ろ足で身体を掻く。

しゃがみ込み、プリンの頭を撫でながらふと視線を感じて、社殿を見上げた。

この神社、由来は古いらしいけれど、どんな神様が祀られているのか、恋愛のご利益があるかは全然分からない。

でも、なぜかここにお参りに来ないと落ち着かなかった。

プリン以外にも、何かが私を待っているような気がしていた。

二年近く通っているけど、今のところ彼氏の影も形もない。毎日毎日、家と職場の往復だけじゃ、神様もどうしようもないか。

こう見えても、一応お付き合ひした人はいたんだけど。

私は大学卒業後、手堅く公務員になった。

市役所の住民課に配属されて三年が経つ。同世代の男性職員もいるけれど、課内には少ない。

その頃、なぜか結婚を焦った私は、当時付き合っていた彼と結婚できますように、とたまたま見つけたこの神社にお参りに来た。

数日後、「他に好きな人が出来た」と彼に振られた。

そもそも結婚したいなんてことを、神頼みした罰が当たったのかもしれない。

だけど、このまま仕事に人生を捧げたくなかった。

私だつて愛されたい。できれば子どもを産んで、幸せな家庭を築きたい。

それ以来、休みのたびにこの神社にお参りに来ている。

この間結婚した大学時代の親友に、神社で良縁祈願していると告白したら大笑いされた。

「なんで神頼みなんでしてんの？ 出会いなんて、マッチングアプリでも街コンでも、いまだきいくらでもあるじゃん」

「言われなくても、そんなこと、とつくにやつてるわよ。警察官、自衛官の街コンでしょ？ 合コンも、パーティーにも行ったし」

「あんたはマッチョ好きだからねえ。それで、収穫は？」

「……だから、仕方なく良縁祈願してるのよ！」

街コンも合コンも、自分史上最悪の苦い思い出になった。

顔も体形も、どこまでも平均的だけど、見られないほどじゃないと思う。

でも、誰からも声を掛けられなかった。話しかけようとしても、みんな私を素通りした。一人であぶれている人でさえ、私に声をかけてこなかった。

自分が透明人間になったみたいだった。

あそこまでいくと惨めだとか悲しいだとかそういう感情を飛び越して、清々しいくらい。

色恋と縁が切れてしまった今、楽しみは、神社でプリンに会うことになりつつある。

「プリン、あんたは今日もかわいいねー」

しやがみ込んで、私が勝手に名付けたプリンの頭を撫でる。

「私に撫でられて喜んでくれるなんて、あんたは本当にいい子」

自分でも病みかけていると思う。

目を細めゴロゴロと喉を鳴らして、私の手に頭を押し付けてくるプリンを、一週間分撫でまくる。自分に信頼を寄せてくれる存在がいるって、究極の癒しだわ。

いつもならプリンを思う存分撫でた後、お礼にちゅーるを食べさせてバイバイする。

けれど、今日は様子が違っていた。

ひとしきり私に撫でさせてくれた後、プリンは「ナアー」と短く鳴いて社殿の方に歩いて行く。

「プリン、今日はちゅーるいらさないの？」

私が声をかけると立ち止まり、また短く鳴く。まるで、ついていって言うてるみたい。

後を追いかけると、ぴんとしつぽを立てて「それでいいのよ」とでも言いたげだった。

私がついてきているのを、時折振り返って確認しては、プリンはずんずん社殿の奥へ進んでいく。

第二章：異世界へ召喚されました

神社のこんなに奥まった場所までは、来たことがなかった。ただプリンに導かれるまま、後を着いていく。

空まで届きそうな木の高さに気を取られていると、いつの間にかその先に大きく広がる田畑や、木造の民家らしきものが点々と現れた。まるで田舎の古民家のような、古めかしい建物。廃墟にしては綺麗すぎるし、それよりも神社の奥は鎮守の森と山だったはず。

「なんか……おかしくない？」

立ち止まった私を、プリンが見上げてくる。

この子は、私のそばにいる。じゃあ、ここは一体どこ？

アスファルトで舗装もされていない、土がむき出しの道。私を見上げたまま「ニヤオン」とひと鳴きして、再び歩き出したプリンの後についていく。

民家や田畑へ近づくにつれて、人の姿もぽつぽつ目に入る。おかしいのは、その人たちが揃いも揃って着物を着ていること。

なにかの撮影現場？ それにしては、生活感が板につきすぎてる。

村なんてこの辺りにあつたつけ？ それにしたって、おかしいものはおかしい。

プリンの後をひたすらついていくと、広場のような場所に着いた。

「猫に導かれて、ようやく来なさったなあ、娘さん」

いつの間に現れたのか、長老とでも呼びたくなるような、仙人みたいな出で立ちのお爺さんが、私に向かつてそう言った。

「……あの、ここはどこですか？ それにようやく……って」

わらわらと着物姿の人たちが、広場に集まつてきた。一体、どこに隠れていたんだろうと思うほどたくさん。

あつという間に、私を囲む人垣ができた。

「二年は、ほんに長かったなあ」

「あの！ ここは一体どこなんですか！？」

私の言葉は聞こえてないのか、聞くつもりがないのか、誰も答えてくれない。こうなったら自分で調べるしかない。

肩に掛けていたトートバックから、スマホを取り出すと圏外。

プリンに付いて歩いてきた道を振り返ると、さっきまであつたはずの道は、魔法のように消えていた。

周りに目を向けても見渡す限り山と森だけ。そして人ばかり。本当に意味が分からない。取り囲む人達が身にまとっているのは、着物ばかり。

ブラウスとスカート姿の私は、彼らにじろじろ見られている。

異様な光景を目の当たりにして、私の脳はそれ以上真実を追求しようとするのをやめた。

いろんな年代の男女が集まってきているけれど、なぜか若い女の子たちからは、敵意を持って睨まれているような気がする……。

「さあさあ、こんなところで足止めさせるわけにはいかん」

「そうじゃ、伊織さまがお待ちかねじゃ。世話役のおなご衆、娘さんの支度をしてやつてくれ」
長老の号令で、中年の女性四人が私を包囲した。

「……ちよつと待つて！ 私は帰れないんですか？ 神社へお参りに来ただけだったのに……」

半分、泣きそうになりながら長老に訴える。でもその答えは非情だった。

「二年間、伊織さまは首を長くしてあなたをお待ちになつていた。我らが帰すわけにはいかないのですよ」

第四章…生き神様からの告白

廊下の突き当たりの引き戸を開くと、がらりと雰囲気が変わり、質素ながらも上品な造りになっていた。多分、下の広場から見上げた、あのお屋敷の中に入ったんだろう。

広くて長い廊下はピカピカに磨き上げられていて、床板を踏むたびにキュツ、キュツと音を立てる。そういえば、京都のどこかに、こんな仕掛けのある古い建物があつた気がする。差し込む光が障子の格子の影を、廊下に落としていた。

世話役の女性たちが続いて、随分歩いたような気がする。彼女たちは、奥まった大きな部屋の前で立ち止まった。部屋の前には、金装飾が施されている。

きつとここが、伊織さまの部屋なんだ……。

世話役が私を襖の前に立たせると、廊下に恭しく膝をつき、中に向かって声をかけた。

「失礼いたします、伊織さま。奈緒さまをお連れしました」

すと襖が開き、部屋の奥に座っている男性と、不意に目が合う。愛想笑いを見ると、思いつきり目を逸らされてしまった。

もしかして、失礼なことしちゃったのかな。

それにしても、綺麗な人だと思った。こんなに綺麗な人とは、そうそうお目にかかったことはない。

涼し気な目元、凛々しい眉、引き締まった口元——人形のように綺麗だけれど、ガタイの良さはどう見ても男の人。

独特の空気をまとっている、この人が伊織さま……なの？

「……お入りなさい」

低い声で言われ、恐る恐る畳の上に踏み込む。

襖が勝手に閉まり、ふと横を見ると白髪混じりの老女が扉のそばに座って控えていた。

「奈緒さま、どうぞ座布団にお座りください」

どうして私の名前を知ってるんだろう？

老女に言われて、伊織さまと思われる人物の向かいの座布団に座る。よく見ると彼の膝の上で、プリンが丸くなつて眠っていた。

「初めまして、奈緒。私が伊織だ。やつと会えて本当に嬉しい」

彼は扇を手の中で弄びながら、私に向かってそう言った。

私は、彼の目をまっすぐ見てうなずいた。

「私は村を繁栄させる生き神だ。そのためには神事を行い、お務めを続けていかなければならぬ」

「ああ、さつき言つてた一夜を過ぎすことですね」

伊織さまは、苦笑いしながら軽く咳払いした。

「以前は、年に一度、お務めをしていた。娘に種を授け、村の子孫の繁栄と穀物や農作物の実りを豊かにする」

「……それは、分かりました。その神事とお務めのために、彼女たちに……種を授けていた」
少しすまし顔をしていた伊織さまが、こくりと頷く。

「ところで、あなたが種を授けた人たちに、子どもはできなかったの……？」

「さ、さあな……それはなかった、と聞いているが……」

目を泳がせて、伊織さまはつかえながら言つた。

こんな調子で、よく今まで無事に生き神様なんてやつてこれたわね。

「やることやつといて、それですか。私、そういうことに無責任な人、嫌い。それで私を嫁にするってどういふこと？」

「……奈緒が神社にやつてきた二年前、私は御神鏡で奈緒の姿を見て一目で惹かれた。それ以来、村の娘はこの屋敷に上げていない」

「じゃあ、その間の神事はどうしてたの？」

伊織さまはぽつと顔を赤くしてうつむいた。もしかして、また悪いこと聞いちゃったかな……？

「誤解されたくないから、奈緒には言う。……自分で定期的に精を出して、それを奉納していた」
「……つまり、村の人にとつてありがたい生き神様の種を、伊織さまが自己処理して出してたつてこと？」

「……そこまできつぱり言われると、身もふたもないな。でも、それだけでは足りなくて、年々作物の育ちは悪くなり、生まれる子どもも減つていて……」

この世界も、少子化問題に悩まされてるんだ。

それにしても伊織さまは、何を思い浮かべながら自己処理してたんだろう。見た目だけなら、そんな生々しいことは縁がなさそうなのに。でもいくら綺麗な顔してても、伊織さまだつて男だ。定期的に出さないと身体に悪いって聞いたことある。

そんなことを思いながら、伊織さまが淹れてくれていたお茶を頂く。湯上りで喉が渴いていたせいで、ひと息に飲み干してしまった。

ほつとひと息ついて、顔を上げると、いつの間にか伊織さまが手の届く距離にいた。湯呑を取り上げられ、ずるずると壁際に追い詰められる。

「奈緒、婚礼の儀は今夜だが儀式は形だけ。神事と奉納はすぐにでも必要だ。お前のことは、私が生まれてから初めて、唯一無理を通してでも、どうしても欲しかった娘……」

——何を言ってるんだ、この人は。

伊織さまの目は若干、血走っていた。だけど、それだけ必死にならざるを得ない状態なのかもしれない。

「……そんなことを言われましても……。私には私の生活や、仕事があるのに」

「お前は、そんな冷酷な娘ではないだろう？ 本当は寂しがり屋なのに強がる癖があつて、鈴音にも優しい。奈緒は私の女神で、この村の救世主に違いないんだ」

大きな手で頬に触れられて、するすると撫でながら伊織さまにそう言われる。

いやいや、それはいくらなんでも、買いかぶり過ぎです。

「……それなら、ありがたい」

伊織さまは私の手を引いて立ち上がらせると、壁際からさつき座っていた部屋の中央まで移動した。私も素直に彼に付いていく。

膝がつく距離で向かい合って座り、ちよつとした気まずさを味わう。

「奈緒、早速だが神事と奉納を今すぐ始めたい。早ければ早いほどいい」

「い、今から？ 準備とか……は？」

「何も必要ない。準備はもう、できているだろう？」

湯殿で、身体を隅々まで洗われた意味がやつと分かった。

「……これじゃ、「今からセックスしよう」と誘われてるようなものじゃない。」

「……嫌か？ それとも帰りたいのか？」

伊織さまの綺麗な顔で縋るように見つめられると、胸が切なく縮んで、下腹に小さな疼きが生まれてしまう。

「……正直に言うのと、嫌なんかじゃない……けど……、避妊は？」

「二年間、ずつとお前のことばかり考えてきた。神事は神事、これはこれ、だ。私はただ奈緒を抱きたい。それからできれば、奈緒との子も欲しい。お前は違うのか？」

「……そう言われても、今日会ったばかりだし……」

「私が妻になつて欲しいのは、奈緒だけだ。お前が、もし私との子を身籠つたら、片時も離れずそばにいる。身籠らなくてもそばにいる。もう、離したくないんだ」

「結局、どっちにしてもそばにいてくれるのね……」

こんな人から、妻になつて欲しいと乞われていることも、離したくないと言われていることも、まるで夢みたいで。

だけど、もうそんなのどっちでも良かった。伊織さまは、私なんかを必要だと言ってくれる。それなら、私はその気持ちに答えればいい。

一瞬の隙を突かれて、畳の上に素早く組み伏せられてしまう。まだ昼間なのに。

大きな身体に馬乗りになられて、慣れた手つきで帯留めを解かれていく。

久しぶりの感覚、清楚で禁欲的なイメージがあつた着物を脱がされるといふ、背徳感も相まって胸が高鳴っていた。

私つて、本当はこんなに軽い女だつたんだ――。

「……この日が来るのを、どれだけ待ったか」